

圖 版 要 項

一七・八二七 大雅筆樓閣山水圖 東京 男爵 團伊能氏藏

金地著色 六曲屏風一雙 各幅 一六八・二二寸(一五尺五寸五分)
三七四・二二寸(一尺三寸五分)

對岸の連山は霞み、數隻の帆船は風を孕んで、澎湃として浪たつ大江を渡つて来る。此岸に近づかんとして帆を下す舟中に、動の舟人と靜の客人とがおのおのその位布を占めてゐる。岸邊の柳は飄々と靡き、樹々の梢は江風に戦いてゐる。ここに峭崖を背にし老樹に覆はれた樓閣が嚴然として建つ。樓上の僊客は悠々乎として、江上遙かの眺望を恣まましてゐる。廓外をめぐる路上には、杖を曳く高士が侍者を伴つて、何處に行かんとするか。連山の頂は群青、水波は青藍、樓閣の軒柱は濃朱、すべて金地に映發して、塵外の天地が潤然と開かれてゐるのである。

他の一隻は雲霧の罩める山中に於て、懸瀑の山底より滾々と流れ去る溪川の邊、樹々に圍繞されて、巖上に建つ樓臺が岩づたひの廻廊を設けて、巖頭の庵廡に通じてゐる。樓内に於ては今や朱卓を圍んで、僊客が歡談に耽つてゐる。また巖頭庵居の主客は默然として、ただ山中寂寞の音に耳を借してゐるのか。

(寸原) 印圖水山閣樓筆雅大

而して急湍にかかる橋上には高士行樂の姿が見られ、溪流に沿うた路上では、煎茶閑談の高士が對座してゐる。また崖沿ひの路上では、高士が二人イんで何を語りつつあるのか。いづれも塵世と隔絶して、悠々自適の高士僊客を描いて遺憾がない。巖頭の群青、常磐樹の綠青、卓布の濃朱すべて金地に照應し、まこと幽邃の佳境がここに展示されてゐるのである。

一雙あはせ大觀して、まづその構想の大なること、山川はもとより巖石樹木の布置に至る、すべて自然寫象を骨子として構成し而も筆致の諧調自在なること、而して濃彩を從横に驅使し渾然たる畫致をつくり、あくまで禪脫至妙の境地を啓闡せるはわが大雅をまたざれば、よくなし能はぬところである。兩隻端下隅にともに白文方形「九霞山人」と朱文方形「池無名印」の二顆を押しまた一隻に朱文長方形「前身相馬方九皐」を有するのみで、年記も款記もない。ただその逸筆飛墨の畫態を看て、吾等は竹田の教へるままに、大雅の晩期に近い逸作と認得するばかりである。

二・三 梁楷筆出山釋迦圖 東京 伯爵 酒井忠博氏藏

絹本淡彩 挂幅裝 横 一八・四寸(一尺九寸一分)
一五・〇寸(一尺七寸二分)

四・五 梁楷筆雪景山水圖 東京 伯爵 酒井忠博氏藏

絹本淡彩 挂幅裝 横 一五・〇寸(一尺六寸七分)
一五・〇寸(一尺六寸七分)